連載17　やまとが訊く
失敗の本質
繰り返す野党の自滅

今年2月に行われた衆議院議員選挙の直前に、立憲民主党は、公明党と新党、中道改革連合を結党し、ほとんどの立憲議員が中道に入党して選挙に臨む中、茨城6区の青山大人氏は、ただ一人、無所属で出馬しました。

その決断は、支援者らの賛同を得、圧倒的不利な状況の中、10万4844票を獲得し、自民党候補者に約2500票差で敗れはしたものの、全国の有権者の心を動かしました。

8月末、中道改革連合は、参議院の立憲民主党、公明党との「3党合流協議」決裂し、結党からわずか8カ月での分裂、解体が決定しました。この一連の騒動について、青山大人氏に単独インタビューを行ないました。

青山大人（あおやま　やまと）

1979年、茨城県生まれ。土浦一高・慶應大（経）卒業。2006年、27歳で茨城県議会議員に初当選。当時、全国最年少の都道府県議会議員として注目を集める（以降2期連続当選）。2008年には日米青年政治指導者交流プログラムの日本代表団に選抜。

2017年、衆議院議員に初当選（以降3期連続当選）。国会では数々の議員立法を提出する傍ら、教育・消費者問題の委員会理事として活躍。自ら関わった法案は全て修正を実現。〝賛成か反対か、ではなく、〟より国民のためになる法律を世に出す、立法家。

2026年1月の衆院選では、148人の中でただ一人無所属で出馬するも僅差で落選。翌朝も駅での活動を継続するなど、いかなる状況でも行動し続ける姿勢を体現。現在は次回衆院選に向けて茨城6区（つくば市・土浦市・石岡市・かすみがうら市・つくばみらい市）で精力的に活動中。二児（9歳・7歳）の父。



――中道改革連合が党分裂に至りましたが、どのように感じておられますか？

青山　まずもって私は今も無所属であり、中道の関係者ではないので、あくまで外側から見た個人の見解ですが、結成後わずか8か月での分裂は想像以上に早かったという印象です。

今年の衆院選前の中道結党にあたって、公明党は時間的な制約がある中でも、党内手続きを経た上で、衆議院選挙後に立憲民主党と公明党双方の参議院議員も中道に合流させるという公党間の約束のもとで進めていたわけです。

一方、立憲民主党側は、当時の執行部の一部だけで話を進めており、党内手続きの不備が選挙後に浮き彫りとなって、立憲側の参議院議員は合流しないと言い出しました。公明党側にとっては、いい迷惑だったのではないでしょうか。

――選挙前、野党第一党だった立憲民主党を実質的に解党し、中道結党を主導した当時の立憲執行部の野田代表、安住幹事長、馬淵代表代行の3名の責任は重いはずですが、あまり表に出てきていないように見えます。

青山　他人を批判したくはないので、3名の責任について私からあえて触れませんが、有権者の皆様の審判はすでに下されたわけです。立憲民主党という党を消滅させてしまった事実もさることながら、日本の民主主義に大きな損害を与えたことは、未来永劫その罪が問われると思います。

野党第一党の自滅によって、総選挙で与党が圧倒的な議席を獲得し、野党なき国会では立法府の機能が失われてしまいました。戦後培ってきた日本の民主主義の土台が崩れて行くかもしれません。

――もし青山さんが中道に合流して今年の選挙に出馬し、当選していたとしたら、この状況でどうされますか？

青山　仮に私が先の衆院選で中道から立候補して当選し、現職の衆議院議員だったとしたら、立憲の参議院議員の中道への合流を実現させるために全力を尽くしていたと思います。

仮に立憲の参議院議員全員の合流が叶わなくても、1人でも2人でも合流を進めるべきだったはずです。公党間の約束は、そう簡単に破ってよいものではありません。

03-10月号　青山大人p8-11.indd　8-9
26/09/18　15:15

こう言うと、「青山は真面目すぎる」と言われてしまいますが、「約束は守る、できない約束はしない」。それが私の信条です。だから私は、いつも申し上げている通り、この20年間、政権交代可能な二大政党の実現を目指して野党第一党に属し、その政党が近い将来、政権を担えるように、時に党内の左派勢力から批判を受けながらも、党内の意識・制度・政策の改革に努めてきたわけです。

相変わらず批判ばかりの野党議員達

――中道から出馬した議員が、落選後すぐにSNS上で中道への批判を展開していることに違和感を覚えました。146人いた立憲の衆議院議員のうち、中道に加わらなかった青山さんや原口さんが批判するのであれば分かります。原口さんは選挙戦の最中から、中道を猛烈に批判していますが、青山さんが公に批判することはないように見えます。それがかえって青山さんの政治家としての価値を高めていると、先日もある著名な方がおっしゃっていました。

青山　選挙直前、私も含めて立憲民主党の衆議院議員は、数日のうちに「立憲民主党を全員離党し、衆院選には無所属か中道のどちらかでしか立候補できない」と言われました。ですから、中道を選んだ人たちは皆、自分自身の意思でそう選んだのです。

それにもかかわらず、落選後に中道を批判するのは筋違いだと思います。結果的に私も当選できませんでしたが、無所属を選んだことに後悔はありませんし、落選したのはひとえに私自身の力不足です。

中道から出馬して落選した元立憲の議員の中には、私のところに「今後、政治活動を続けるにはどうしたらいいか」と相談に来る方もいます。私は彼らに「なぜ政治家になりたいのか、原点に立ち返って自問自答すべきだ」とアドバイスしています。

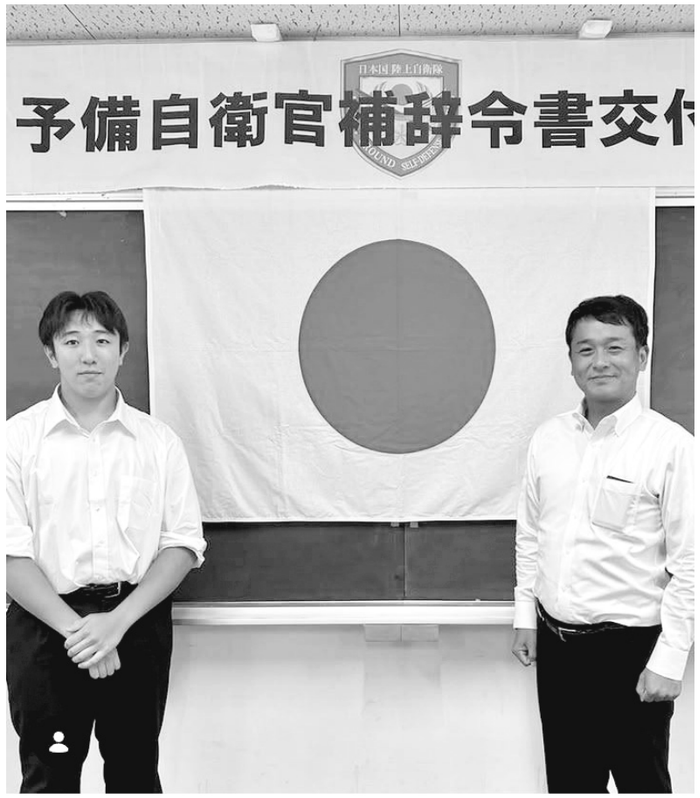
国会にいれない悔しさ

――自民党一強となった現在の高市政権を、どのように見ていますか？

青山　食料品の消費税を、2年間限定で8％から1％に引き下げるなど疑問を感じる部分もあります。この間、1％・8％・10％という3つの税率が併存する複雑な税制になります。

また、「外国人育成就労制度」（2027年4月開始予定）は、技能実習制度を廃止して導入される新制度で、同一職種内であれば転籍が可能になるほか、特定技能2号を取得すれば、在留期間の更新上限がなくなり、配偶者や子どもの帯同も認められます。つまり制度上、外国人が事実上、半永久的に国内にとどまれる仕組みであり、もっと国会で議論すべきだと思います。

さらに電子教科書導入法案に関しても、教育先進国と言われる北欧では、逆に電子化授業を見直す動きが出ています。私は長年、衆議院文部科学委員会の理事を務めていましたが、私が国会にいたら、そう簡単にこの法案は通していませんでした。これらの法案の成立過程を見ても、国会が十分に機能していないと感じざるを得ません。



国政への返り咲きを目指す

――国会への復帰を目標に、現在どのような活動をされていますか？

青山　選挙から半年以上が過ぎようとしていますが、色々なことがありました。

家族を支えるために仕事をしながらですので、今までのように全ての時間を政治活動に割くことはできなくなってしまいましたが、戦時中生まれの方が、青山を国政に戻すまでは元気で頑張ると言って、何度も人を集めて会を設けて下さったり、本来であれば自民党支持の建設業者の方が音頭をとって下さり、中小企業の皆様の会で青山に講演させて頂いたりしています。

残念ながら、落選を機に縁遠くなってしまう方もおります。でも、それを全部含めて政治活動だと思っています。

最近では予備自衛官補に入隊しました。予備自衛官補は常勤の自衛官とはまったく立場が異なりますが、今の立場で少しでも国に貢献できるよう現場を知り、自分自身で経験を積んでおくことが大切だと考えて入隊しました。

――自民党の一強化や野党の乱立など、無所属として選挙を戦うのは非常に厳しい政治状況のように思います。

青山　無所属で出馬すると、選挙期間中のネット有料広告や配布できるビラの枚数に制限があり、ただでさえ不利な条件を強いられます。また最近、政治家がいかにSNS上で目立つかを競う面もありますが、政治とは本来そういうものではありません。

あくまで政策の中身で判断してもらわなければ、政治のレベルは上がって行きません。いくつかの政党から打診も来ていますが、今決まっていることは、国政へ返り咲くために、次の衆院選に茨城6区から再び挑戦することです。その国政復帰の目標を達成するために日々精進してまいります。

（聞き手・文　立川秀明）

03-10月号　青山大人p8-11.indd　10-11
26/09/18　15:15